

# レベル別漢字語彙処理能力テストの問題形式

## — WEB 漢字テストのマルチレベル化に向けて—

加納 千恵子

### 要 旨

外国人日本語学習者を対象にした WEB による初級の漢字語彙処理能力テストを開発し、初級から上級までの異なるレベルの学習者に受験させた。同じ初級漢字を使ったテストでも、出題意図や問題形式などによって、測ることのできるレベルが異なることがわかった。字形認識力や意味理解力を問うような正答率の高い、易しい問題では、初級レベルと中上級レベルの結果には明らかな差が見られるが、中級と上級の差を見ることはできなかった。一方、単漢字の音読み力や、文脈的处理能力を問うような難度の高い問題では、初級漢字を使ったテストでも中級者と上級者の間に明らかな差が見られた。今後、漢字語彙処理能力テストをさらにマルチレベル対応のアダプティブテストにするためには、レベル別の漢字や漢字語彙の選定ばかりでなく、さまざまなレベルの語彙処理能力を測るための評価項目および問題形式の設定が必要であろう。

【キーワード】 漢字語彙処理能力 単漢字の音読み力 文脈的处理能力  
マルチレベル対応 アダプティブテスト 問題形式

## Testing Forms of Kanji Vocabulary Processing Ability for Different Levels: developing a multi-level web-kanji test

KANO Chieko

【Abstract】 We developed a web-based test of Kanji vocabulary processing ability for beginners, and asked the international students of various Japanese language levels to take it. As a result, it can be said that some easy types of questions like asking pattern recognition ability and meaning processing ability etc. can distinguish beginners' level from intermediate and advanced level but cannot distinguish intermediate from advanced level. Some types of questions like asking ON-reading processing ability and context processing ability etc., however, can distinguish three levels; beginner's, intermediate and advanced level. In this paper, we examine various types of testing forms to measure intermediate and advanced level of kanji vocabulary processing ability for developing a multi-level adaptive web-kanji test.

【Keywords】 Kanji vocabulary processing ability, ON-reading processing, context processing, multi-level, adaptive test, testing forms

## 1. はじめに

外国人日本語学習者が表語文字である漢字を使って文を理解したり文を産出したりする場合には、漢字の「形・音・義」すなわち、「字形」「読み」「意味」という3つの情報に加えて、漢字が造語成分としてどのように使われるか、またその語が文中でどのように使われるかという「用法」の情報をも処理する必要があると考えられる。これを簡単に図で表すと、図1のようになる。

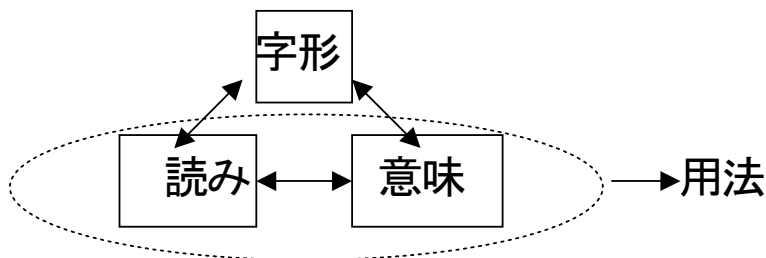


図1. 漢字の情報

従来の漢字の読み書きテストは、これらの情報の連合がトータルに処理できているかどうかをみる総合的全体評価であったため、初級の非漢字圏学習者にとっては、学習上の努力がなかなか結果に反映されにくく、学習動機を削ぐ結果にもなりかねなかった。

そこで、加納・他(2002)、加納・酒井(2003)および加納(2004)では、これらの漢字に関わる情報の処理がどの部分までできているかを分析的にみる評価方法を考え、字形処理、意味処理、読み処理、用法処理という4つの処理能力を測るという観点からテスト問題を作成し、初級の漢字語彙処理能力測定テスト(以下「漢字テスト」と略す)の開発を続けてきた。

また加納・酒井(2003)では、この初級漢字テストをコンピュータ上で受験可能な形にするためのプロトタイプ版について報告したが、加納(2007)のWEBによる初級漢字テスト(以下「WEB漢字テスト」と略す)では、紙のテストやプロトタイプ版テストとは問題形式を変えた部分がある。このWEB漢字テストを初級から上級までの異なるレベルの日本語学習者に受験してもらったところ、同じ初級漢字を使った問題でも、正答率の高い易しい問題から、上級学習者にとっても難度の高い問題まで、さまざまな処理能力を要求する問題形式があることがわかった。

今後、このWEB漢字テストをマルチレベル化し、学習者の回答行動をテストシステムが自動的に判断して、出題されるテスト問題の難度を上げていき、最終的には学習者の漢字語彙処理能力を初級レベルから上級レベルまで判定できるようなアダプティブテストの形にしていきたい。そのためには、中級レベル、上級レベルのための漢字・漢字語彙を選定しなければならないだけでなく、レベル別に学習者にとって識別度の高い評価項目およ

び問題形式を設定する必要があると考えられる。そして、そのような評価項目および問題形式のテスト問題数を増やし、より多くの受験者データをとって分析、考察することによってさらに問題を精選していかなければならないだろう。本稿では、初級の WEB 漢字テストの試行結果から、テスト問題の難度と問題形式の関係についての考察を行う。

## 2. WEB 漢字テストの概要

### 2.1 WEB 漢字テストの流れ

この WEB 漢字テストは、以下の図 2 のように、筑波大学留学生センターにある日本語能力測定システム（Tsukuba Test Battery of Japanese 2 = TTBJ2）の中に、SPOT テスト<sup>1</sup>（Simple Performance-Oriented Test）、およびプレースメントテスト<sup>2</sup>と並んで置かれている。

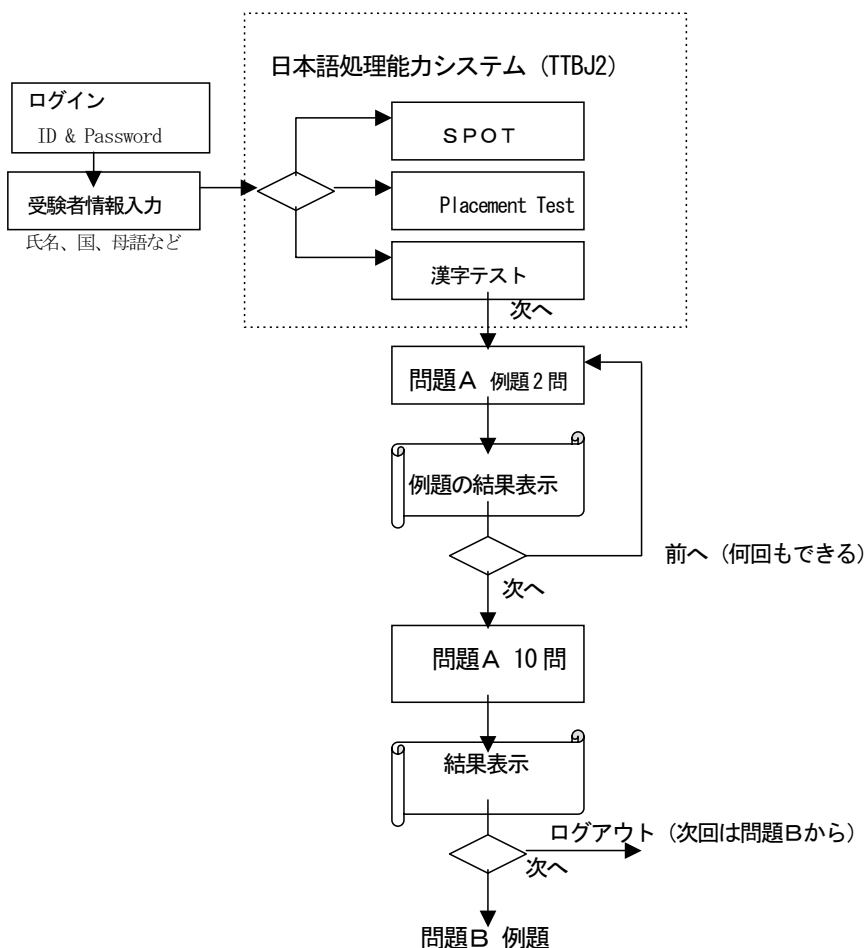


図 2. TTBJ2 の中の WEB 漢字テストの流れ

受験者は、まず ID とパスワードを入れ、インストラクションを英語で読むか、日本語で読むかを選択して、ログインする。その後、プロフィールのページで、受験者情報の入力を求められる。氏名、国、母語などの必須情報にはマークがあり、その入力が終わると、次の画面でテストを選択することができる。漢字テストを選択すると、表1のような A から M のテスト群のリストが表示され、「次へ」のボタンを押すことによって、各2問のサンプル問題の後、各10問ずつのテストが開始される。

表1. WEB 漢字テストのテスト群リスト

A	漢字－英語意味	Kanji-English meaning	(意味理解力をみる問題)
B	反義漢字	Kanji with opposite meaning	(意味理解力をみる問題)
C	漢字－読み	Kanji-Reading	(読み処理能力をみる問題)
D	漢字－同音	Kanji-Homophone	(読み処理能力をみる問題)
E	漢字－書き	Kanji-Writing	(書き処理能力をみる問題)
F	漢字－構成要素	Kanji-Parts	(書き処理能力をみる問題)
G	漢字－活用	Kanji-Inflection	(文法的処理能力をみる問題)
H	漢字－品詞	Kanji-Parts of speech	(文法的処理能力をみる問題)
I	漢字－用法	Kanji-Usages	(文脈的処理能力をみる問題)
J	漢字－語彙	Kanji-Vocabulary	(文脈的処理能力をみる問題)
K	漢字－音声	Kanji-Hearing	(音声処理能力をみる問題)
L	漢字－音説明	Kanji-Auditory explanation	(音声処理能力をみる問題)
M	漢字－構造型	Kanji-Structural pattern	(字形処理能力をみる問題)

テストを開始すると、まず例題が出題される。それらに答え、その結果表示を見てから本問題に入るという流れになっているので、やり方がわからなければ、何回でも前にもどって例題を試すことができる。問題の中には、インストラクションを読んだだけではわかりにくい形式のものもあるが、この WEB 漢字テストでは、サンプル問題を何回でも繰り返し受けることができるため、英語／日本語のインストラクションがよくわからなくても、実際にサンプルをやってみることによって、やり方を理解することができる。これは、加納・酒井 (2003) で試作されたプロトタイプ版に比べて、受験者の評判がよかった点である。

一方、本問題の方は1つのセクションで10問がランダムに出題されるが、途中で前にもどってやり直すことはできない。本問題の結果表示のあと、「次へ」を押せば、次のセクションの例題に進み、そのあと同様に次のセクションの本問題に進む。「A」から「M」までの13セクションの問題を全部やるための時間制限は65分（各セクション5分）であるが、時間などの都合で途中でやめたい受験者は、問題のセクションの切れ目でなら、ロ

グアウトすることができる。そしてまた、次にテストを続ける場合には、前にログアウトした直後のセクションから続けることができるようになっている。

本来の設計では、WEB 漢字テストの評価結果は、すべてのセクションが終了した後にまとめて見せることになっていたが、現時点では、各セクションごとに結果を見せる形になっており、最終結果の画面はまだ完成していない。加納・酒井（2003）のプロトタイプ版テストでは、最終画面でセクションごとの結果をまとめて棒グラフで表示し、70%以上の正答率のセクションは赤い色、60%以下の正答率のセクションは青い色で示して、弱いところに注目させるように試みた。学習者からは、どの部分がよくできているか、どの部分がまだ不十分かを視覚的に表示するのは効果的であるとのコメントを得たが、さらに間違えた問題の正答や、その後の漢字学習に役立てられるような注意点や練習方法へのアドバイスなどを希望する意見も出ており、現在さらに効果的なフィードバックをするための結果表示の方法を検討しているところである。

## 2.2 WEB 漢字テストの問題形式と難度

WEB 漢字テストの A から M のテストは、以下の 7 つの漢字語彙処理能力を評価するための項目からなっている。

- |                       |       |
|-----------------------|-------|
| 1. 漢字の意味理解能力をみる問題     | A と B |
| 2. 漢字語の読み処理能力をみる問題    | C と D |
| 3. 漢字語の書き処理能力をみる問題    | E と F |
| 4. 漢字語の用法処理能力をみる問題    | G と H |
| 5. 漢字語の文脈的処理能力をみる問題   | I と J |
| 6. 漢字語の音声による処理能力をみる問題 | K と L |
| 7. 漢字の字形処理能力をみる問題     | M     |

以前の紙の漢字テストでは、読み処理能力をみる問題として文中の漢字語彙の読みをひらがなで記述させたり、書き処理能力をみる問題として漢字を手書きさせたり、字形処理能力をみる問題として漢字の形を 9 つの漢字の構造型（パターン）に分類させたりする問題を出していたが、今回の WEB 漢字テストでは、すべて 4 肢選択の形式に統一した。これは、加納・酒井（2003）で試作されたプロトタイプ版テストにおいて、コンピュータテストに慣れていない学習者の場合、出題形式や回答形式が頻繁に変わると、思い違いや誤解による回答ミスが多く見られることがわかったためである。WEB 漢字テストは、コンピュータ・リテラシーを測るためのものではなく、あくまでも漢字や漢字語彙の処理能力を測るためのものであるから、テストの形式ではなく、内容に注意を集中させようと考え、できる限り問題形式を統一した。

WEB 漢字テストの A から M のテスト問題は、以下の表 2 のような形式になっている。

表2. WEB 漢字テストの問題形式

A	英語の意味の漢字を選ぶ	〈問題＝英語	選択肢＝漢字〉
B	漢字と反対の意味の漢字を選ぶ	〈問題＝漢字	選択肢＝漢字〉
C	漢字語の読みを選ぶ	〈問題＝漢字語	選択肢＝ひらがな表記〉
D	漢字と同音の漢字を選ぶ	〈問題＝漢字	選択肢＝漢字〉
E	言葉の読みから漢字を選ぶ	〈問題＝ひらがな表記	選択肢＝漢字表記〉
F	漢字の構成要素を選ぶ	〈問題＝構成要素	選択肢＝構成要素〉
G	活用形を見て、漢字を選ぶ	〈問題＝送り仮名	選択肢＝漢字〉
H	漢字語の品詞を考えて表現を選ぶ	〈問題＝漢字語	選択肢＝接続の形〉
I	文中で用法が適した漢字語を選ぶ	〈問題＝穴あき文	選択肢＝漢字語〉
J	文中で共起する漢字語を選ぶ	〈問題＝穴あき文	選択肢＝漢字語〉
K	3つの単語の音声を聞いて漢字を選ぶ	〈問題＝音声	選択肢＝漢字〉
L	音声で意味説明を聞いて漢字語を選ぶ	〈問題＝音声	選択肢＝漢字語〉
M	漢字の字形を見て構造型を選ぶ	〈問題＝漢字	選択肢＝構造パターン〉

たとえば、Bの反義字の問題（意味処理能力をみる問題）は、図3のような形式になっている。Qの欄にある漢字「開」と反対の意味の漢字を、4つの選択肢「閉」「聞」「問」「関」の中から選ぶことになっている。選択肢が漢字1字であるにもかかわらず、そのスペースがかなり横に長くなっているのは、他の種類のテストでは選択肢として文が入る場合もあるため、長いスペースを確保する必要があるからである。コンピュータによるテストに慣れていない学生のために、テストの問題形式だけでなく、レイアウトなどもできるだけ統一し、受験者が迷わないように配慮した結果である。

画面の下に見えているオレンジ色のバーは、残り時間の表示である。各セクション10問の制限時間は5分以内で、バーが刻々と短くなっていくのが見える。右上の数字は、現在10問のうち1、つまり最初の問題であることを示している。

AからMの各セクションの問題や内容の特徴については3節で詳しく述べるが、13のセクションのうち、KとLは音声を使うため、ヘッドホンなどをつけなければならない点が他のセクションと異なっている。加納・酒井（2003）のプロトタイプ版テストでは、テストの真ん中にこれらの問題を配置していたために、そこでトラブルが発生すると、テストが途中で止まって、それ以降のテストデータがとれなくなってしまうことがあった。そこで今回のWEB漢字テストでは、トラブルによるデータの損失を最小限に留めるため、最後の方に置いた。また、紙のテストで字形処理能力をみる問題として出題されていた漢字の字形の異同を識別させる問題は、初級者にも易しすぎるということで、プロトタイプ版テストでは形式を変え、選択肢を時間差をつけて提示することによって字形の記憶力を

みる問題として出題したが、他のセクションと全く異なる形式になるため、今回の WEB 漢字テストからは外した。



図 3. 反義漢字の問題 B の形式

### 3. WEB 漢字テストの試行結果と問題形式の検討

2007 年 9 月に筑波大学留学生センターの補講 K400 の受講生 15 名、10 月に予備教育コース秋学期の異なるレベルの学習者 29 名に事前テストとして WEB 漢字テストを受験してもらった<sup>3</sup>。その内訳は、「初中級」レベルが、補講 K400 の受講生 15 名と予備教育 B クラスの既習者 3 名で計 18 名、「中級」（K500 ～ 600 に相当する）レベルが 9 名、上級（K600 ～ 700 に相当する）レベルが 17 名であった。

表 3 は、WEB 漢字テストの問題セクションごとに各レベルの受験者の平均得点を出したものである。

表 3. WEB 漢字テスト (2007.9-10 月) の結果平均

			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	全体
	レベル	人数	英語読	反義字	読み	同音字	書き	構成要素	活用	品詞	用法	語彙	音声	音説明	構造型	平均
2007-9K400	初中級	18 名	88.89	85.44	85.56	41.67	89.44	78.33	58.89	63.89	57.78	68.33	75	46.11	92.22	71.7
2007-10 予備	中級	9 名	98.89	95.56	90	56.67	97.78	93.33	85.56	92.22	78.89	78.89	98.89	85.56	98.89	88.5
	上級	17 名	95.29	95.88	91.76	74.71	98.82	88.82	92.94	97.06	94.71	96.47	98.82	95.88	95.29	88.1
	合計	44 名	93.41	91.55	88.86	57.5	94.77	85.45	77.5	82.5	76.36	81.36	89.09	73.41	94.77	83.6

44名の受験者全体の総合得点の平均は83.6%であり、初中級者の平均が71.7%であるのに対して、中級者の平均(88.5%)と上級者の平均(88.1%)には大差がないように見える。しかし、評価項目および問題形式ごとに見てみると、違いがあることがわかる。

意味理解力をみる問題(A、B)や漢字語の読み書きの力をみる問題(C、E)、音声を聞いて漢字を思い浮かべる問題(K)のように、正答率が高く易しいと思われる問題においては、初中級者と中上級者との間には大きな差が認められるが、中級者と上級者においては、天井効果のため、その間の差異はほとんど見られなかった。

同じ意味情報処理を行う技能をみる問題でも、字形／語形と英語による意味の連合(A)の問題と、反義字・反義語の識別(B)の問題では、後者の方が前者より難しいと言える。ただAの問題は、英語がわからない学生には使えない形式である。意味を絵で表すなどの方法もあるが、象形文字や指示文字の漢字でないと意味理解をみる問題としては難しいため、英語がわからない学生のためには問題Bのように、媒介語を使わずに対象語だけで出題できる形式の問題を作成した。中級レベルになれば、単漢字語だけではなく、熟語の対義語も使って、意味と語形との連合をみる問題もできると思われる。

それに対して、初級から中級、中級から上級へと確実に正答率が上がり、各レベルの間に歴然とした差が認められる問題もある。たとえば、単漢字の音読みが同じかどうかを判定させる問題(D)は、初中級者の平均正答率が41.67%と半分にも満たない難しい問題である。しかし、中級者は56.67%、上級者は74.71%と、レベル別の識別ができるテスト問題となっている。

#### D. 同音字の識別問題

Choose the kanji of the same "ON" reading with the given kanji.

Ex. 行 :

- a. 高
- b. 号
- c. 今
- d. 午

この問題は、単漢字の音読みを想起できるか、という技能をみる問題となっている。初級レベルの学習者にとって、たとえば、「行」や「高」という漢字を見て「いく」、「たかい」と読むこと(訓読み)はそれほど難しくないが、これらが「銀行」の「コウ」であり、「高校」の「コウ」であること(音読み)を想起できるかどうかのポイントである。漢字1字の語は訓読みされることが多いが、漢字熟語になると音読みされることが多く、日本語のレベルが上がるにしたがって漢字熟語を数多く習得していく際に、この音読みの想起ができるかどうか重要なポイントになると思われる。また、一つの漢字の音読みを正しく想起できるかという単一タスクではなく、複数の漢字の音読みを正しく想起し、どれとどれ



が同じかを判断しなければならないという複数のタスク処理能力を要求する問題である点も問題の難度を上げていると思われる。

漢字語の活用や品詞性をみる問題（GとH）や文中での用法をみる問題（IとJ）、音声による意味の説明を聞いて漢字語を選ぶ問題（L）でも、中級者と上級者との間の差がはっきりと出ている。これらの問題は、以前の研究で日本語能力全体との相関が高いと判断された形式であり、レベル別の識別力がある問題と言えるであろう。

しかしながら、漢字語の構成要素をみる問題（F）では、上級者よりも中級者の方が高い平均正答率を示しており、その傾向は漢字の字形処理能力をみる問題（M）にも若干見られた。漢字の構成要素や字形の構造パターンなどの知識は、レベルに関わりなく、学習してきたかどうかの個人差が大きいためであると言えよう。

これらのWEB漢字テストを受験した後で、その結果をフィードバックし、意見や感想を聞いてわかったことは、以前に紙のテストでわかったこととほぼ同じであった。しかし、受験者によれば、紙のテストと比べて、WEBテストの方がかかる時間が短く、処理が速い学生にとっても、処理が遅い学生にとっても、自分のペースでテストを受けることができ、心理的な負担が少ないということがわかった。問題の形式を4肢選択に統一したため、受験者が回答方法で迷うことがほとんどなく、答えやすかったという感想も得た。また、テストの結果がその場ですぐに出ることも良かったとの意見が多かった。しかし、13あるセクションごとに結果が出るため、最後まで途中の結果を覚えていられないという声もあった。形成的評価として学習者にフィードバックをするためには、1セクションごとに結果を出すのではなく、全部終わってからまとめて、どこに弱点があるのかがわかるような形で結果を出すほうが効果的であると思われる。

Aの問題は、選択肢が英単語であるため、英語がわからない学習者には使うことができない。また、Fの問題やMの問題は、漢字の「構成要素」や「構造パターン」という概念がわかっていないと、見分けるのが難しい問題であろう。KやLの問題は、漢字テストに音声を使うという学習者にとっては珍しい試みであるが、テスト終了後に感想を聞くと、「漢字は知っているが、こういう音声で処理するところが自分たちの弱いところなので、もっと練習したい」という意見の漢字圏学習者もいた。

今後は、WEB漢字テストのマルチレベル化に向けて、識別力の低い評価項目、正答率の不適当な項目を中心に項目の削除、選択肢の書き換え、新しい項目の追加などを行う必要がある。さらに、中級、上級レベルの学習者のために、漢字・漢字語の選定を進める一方、その漢字語彙処理能力を測定するためのテスト項目、問題形式についても、広くデータを収集し、選択肢などを注意深く決定しなければならない。

加納・他（1993）には、初級後期を終わって中級に入る学習者（K600レベル）のための診断的評価テストとして開発された「漢字力診断テスト」があり、その評価項目は以下

のとおりである。

- A. 対義字による意味理解をみる問題
- B. 漢字熟語の意味の語構成の理解をみる問題
- C. 漢字の構成要素の認識をみる問題
- D. 語単位の漢字の書き処理をみる問題
- E. 文脈による漢字語の書き処理をみる問題
- F. 漢字語の品詞による用法処理をみる問題
- G. 動詞・形容詞の漢字の活用による送り仮名処理をみる問題
- H. 漢字語の文脈による読み処理をみる問題
- I. 語単位の漢字の読み処理をみる問題
- J. 同音字の音読み処理をみる問題
- K. 漢字の意味、字形、品詞、音読みによるグルーピング認識をみる問題

A、Bのような意味処理の問題は、中級の漢字圏学習者には易しすぎる問題であるが、非漢字圏学習者にとっては、表語文字である漢字の意味理解がどこまで進んでいるかをみるために有効な問題となっている。このテストでは、H・Iの読み問題とD・Eの書き問題が記述式であるため、他がかなりできている漢字圏学習者でも読みが不正確な者が多かったり、品詞などの用法処理が母語の影響でずれていたりするのに対して、非漢字圏学習者の場合は、文法力や語彙力があっても、やはり書きが苦手という結果が出ている。これは両者が混じって学習している補講漢字クラス K600 および K700 においては、互いのできるところと苦手なところを再認識し、協力して学び合うための有効なフィードバックを提供している。また、このテストを受験する中級学習者すべてに共通しているのは、Jの同音字の音読み処理をみる問題やKの問題の中で特に音読みのグルーピング認識をみる問題が難しいということである。これらのテスト問題をWEB化するためには、どのような問題形式が適当なのか、さらに検討を進める必要があろう。

漢字語彙処理能力が上級レベルになるとどのように変わるのかを見るため、筑波大学留学生センターの補講上級漢字クラス J761～J763 および J764～J766 では、加納・他(2001)の各課の事前テストとして「力だめし」という問題を課しているが、フィードバックの際に読みだけでなく品詞情報の確認なども行っている。漢字圏、非漢字圏を問わず、上級においては、音読みよりもむしろ訓読み語の方が難しいという結果が出ており、また未知の3字漢語の意味構造分析や2字漢語の品詞情報も難度の高い項目となっている。

#### 4. 今後の課題

今回の WEB 漢字テストは、初級前期を終了した学習者を想定して作成したものであったが、そのレベルの学習者からは「訓読みで知っていると思う漢字でも音読みが弱いこと、漢字の言葉の文中での用法の知識が不十分であることなどがわかったので、これからの勉強に役立てられそうだ。」という感想を得ることができた。当初の目的であった初級前半の学習者の形成的評価として機能するテストは実現できたのではないと思われる。

また、今回テストを受けた学習者のうち、中級、上級の学習者からは「出題された漢字がやさしかったので、テストというよりは、クイズのようで面白かった。特に音声を使った漢字処理問題が面白く、他にもさまざまな異なる切り口で漢字や漢字語彙を見ることができるのがわかり、学習方法としても工夫できるのではないか。」という肯定的な評価が得られた。レベルが違って、従来の漢字の読み書きテストとは異なる評価項目によるテストを受けることによって、学習者が漢字のさまざまな学習方法について考える機会となったことが窺われ、WEB 漢字テストには、そのようなメタ認知的な効果も期待されるのではないかと考えられた。

今後の課題としては、中・上級レベルの学習者にも対応できる内容と形式のテスト問題を開発することが急務である。中・上級レベルといっても、単に難度の高い漢字や漢字語彙を出題するだけでなく、中・上級のレベルで要求される漢字語彙処理能力をさらに検討し、効果的な問題を作成する必要があると思われる。例えば、漢字熟語の語構成をみる問題、漢字の音読み処理だけでなく訓読み処理を中心にみる問題、複数の処理能力をみる問題などである。また、運用力をみるためには、処理スピードも大きな問題になると思われる。文法や文型知識の運用力をみるテストとして定評のある SPOT のように、文中の（ ）に漢字 1 字を入れさせる「漢字 SPOT」のようなものも試作中である。それらを WEB 化して、日本国内のみならず海外の様々なレベルの学習者の大量のデータを集めることによって、初級から上級までマルチレベルに対応できる漢字語彙処理能力テストをアダプティブテスト化していきたいと考えている。

※なお本研究は、平成 19 年度日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究 (B)「外国人学習者の漢字語彙処理能力測定システムの開発および利用に関する研究」(研究代表者: 加納千恵子) からの助成を受けている。

#### 注

1. SPOT テスト (Simple Performance-Oriented Test) は、自然な速度の音声テープを聞きながら、各問題文中の 1 か所にひらがな一文字分の穴埋めディクテーションを要求する日本語テストである。詳しくは、小林 (2005) を参照。

2. プレースメントテストは、筑波大学留学生センターにおいて、新しく来日した留学生の日本語能力を判定し、補講コースのどのレベルにプレースするかを決めるために各学期の始めに実施されているテストである。まだ紙の形で実施されているが、WEB化が計画されており、現在は文法のテスト問題の一部が「レベル認定テスト」として格納されている。
3. 筑波大学留学生センターの補講日本語漢字クラスは、プレースメントテストの結果、以下の7レベルに分かれる。

K100：『BKB(Basic Kanji Book)』 vol.1 の1課～6課を学習する入門期

K200：『BKB』 vol.1 の7課～14課を学習するレベル (初級前期)

K300：『BKB』 vol.1 の15課～22課を学習するレベル (初級前期)

K400：『BKB』 vol.2 の23課～35課を学習するレベル (初級中期)

K500：『BKB』 vol.2 の36課～45課を学習するレベル (初級後期)

K600：『IKB(Intermediate Kanji Book)』 vol.1 の1課～5課を学習するレベル

K700：『IKB』 vol.1 の6課～10課を学習するレベル

また、2007年秋の集中日本語 (予備教育) コースは、大使館推薦および大学推薦の国費留学生の外に、教員研修留学生、日本語日本文化研修生、日韓理工系学部留学生などからなっており、初心者 (Aクラス)、初中級既習者 (Bクラス) および中上級既習者 (Dクラス) に分けて授業を行った。

## 参考文献

- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智 (1993) 『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book』 vol.1, 凡人社
- 加納千恵子 (2000) 「中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 15号, 35-46
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智・平形裕紀子 (2001) 『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book』 vol.2, 凡人社
- 加納千恵子・酒井たか子・小野正樹・當作靖彦 (2002) 「漢字処理能力測定テストの試み」『国際会議 CASTEL/J2002 PROCEEDINGS』 カリフォルニア大学サンディエゴ校, 143-146
- 加納千恵子・酒井たか子 (2003) 「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 18号, 59-80
- 加納千恵子 (2004) 『非漢字圏学習者の漢字語彙力測定のための標準テストの開発』平成12～15年度日本学術振興会科学研究費補助金による基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書 (課題番号: 12480059), 1-130

- 加納千恵子（2007）「外国人の漢字語彙処理能力の評価 -WEB による漢字語彙処理能力テスト -」『第 20 回日本語教育連絡会議報告書』
- 小林典子（2005）「言語テスト SPOT について -用紙形式から WEB 形式へ-」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20 号， 67-82
- 酒井たか子（2005）「音声情報の関わる漢字能力とその測定の試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20 号， 45-56